

〔平家物語六〕あふひのまへの事

それに何より又哀なりし事には、中宮の御方に候はれける女房の召仕ひける上童、思はざる外龍顏倉○高に玄せきする事ありけり、たゞ世のつねあからさまにてもなくして、まめやかに御心ざし深かりければ、主の女房も召つかはず、却て主のごとくにぞいつきもてなしける。○中略此人

女御きさきどももてなされ、こくも仙院ともあをがれなんすとて、其名を葵の前と申ければ、内

にはあふひ女御などぞさゝやきあはれける、主上は是をきこしめして、その後はめさりけり、是は御心ざしの盡ぬるにはあらず、只世のそしりをはゞからせ給ふによつてなり、されば御ながめがちにて、づやく供御もきこしめさず、御惱とて常は夜のおとゞにのみ入らせおはしま

す、其の時の關白松殿房○基此よし承りて、主上御心つきぬる事こそおはすなれ、申なぐさめ參ら

せんとて、急ぎ御參内ありて、さやうにえい慮に懸らせましまさんにおいては何條事か候べき、件の女房召れ參らすべしと覺え候、玄な尋ねらるゝに及ばず、基房やがて猶子に仕候はんと奏せさせ給へば、主上仰せ有けるはいざとよそこにはからひ申もさる事なれども、位をすべつて後はまゝさる例もあるなり、まさしう在位の時、さやうの事は後代のそしり成べしとて、聞召も入れざりければ、關白殿力およばせ給はず、御涙をおさへて御退出ありけり、其後主上縁のうすえうの匂ひことに深かりけるに、古き事なれども思召出て、かうぞあそばされける。

恐れぞ色にいでにけり我こひはものやおもふと人のとふまで、冷泉の少將たかふさ、是を賜はりついで、件のあふひの前にたばせたれば、是を取て懷に入れ、かほ打あかめ、例ならぬ心ち出來たりとてさとへ歸り、打ふす事五六日にして、終にはかなく成にけり、君が一日の恩の爲に、妾が百年の身をあやまつとも、かやうの事をや申べき。

〔源平盛衰記二十五〕此君賢聖并紅葉山葵宿禰村鄭仁基女事